

## 飛鳥井家歌学とその継承

日高, 愛子

<https://doi.org/10.15017/1654590>

---

出版情報：九州大学, 2015, 博士（文学）, 課程博士  
バージョン：  
権利関係：全文ファイル公表済

論文題目

飛鳥井家歌学とその継承

氏名 日高愛子

## 論文内容の要旨

本論文は、飛鳥井家の歌学の確立と継承について、歌学と蹴鞠書や作法書、秘伝書といった周辺領域の資料との関係性を通して通史的且つ総合的に考察するものである。

第一部では、室町期における飛鳥井家の歌学の確立と享受について考察した。

第一章では、飛鳥井流の秘伝の形成過程とその構成について検証した。第一節では、飛鳥井雅親（栄雅）の『古今集』講釈を基とする聞書『古今栄雅抄』ならびに『蓮心院殿説古今集注』の秘伝の構成について、特に古今伝受の大事とされる「三木三鳥」を中心に、その内容が大内家へ相伝した秘伝書に依拠していることを明らかにした。また第二節では、宋世（雅康）の関わる飛鳥井流切紙口伝にも秘伝書の内容が援用されていることを明らかにした。

続く第二章、第三章では、『古今栄雅抄』および『蓮心院殿説古今集注』の享受の一端を追補や伝本の書入れ部分から検証した。『栄雅抄』再編時における後人の追補である一条兼良説の引用姿勢を見ると、兼良の講釈を基とする『一禅御説』のほか、これまで指摘のない『柿本備材抄』からも引用が確認される。『柿本備材抄』には兼良の息良鎮の関与が考えられ、故に『栄雅抄』の再編者が良鎮から僅かに相伝を受けていた可能性を指摘できる。また、『歌林良材集』『伊勢物語愚見抄』『花鳥余情』の引用からは、『古今集』の域を脱し、諸注が折衷されていく享受の過程が確認される。第三章では、『蓮心院殿説古今集注』の伝本系統について、近年新たに見出された東山御文庫本も含めて整理し直した。そのうえで、広島大学附属図書館蔵伝冷泉為和筆『古今聞書』の膨大な書入れの性格を再検証し、『古今栄雅抄』再編の場合と同様に、享受の段階で定家の『僻案抄』や一条兼良説が追補されていくことを指摘した。

第二部は、歌道全般の継承について、堂上と地下の両視点から時代を追って検証したものである。

第一章では、家督と家学の継承をめぐる歌道家の嫡流と庶流の問題について、雅親の猶子として諸芸を相伝されながらも、家の相続を許されず庶流として生きた雅康の詠作活動から考察した。一般的に定数歌は、歌の鍛錬や奉納歌など、形式的なものとして捉えられることが多いが、雅康が晩年に多く残した定数歌には、庶流としての葛藤や模索、歌蹴鞠道が精神が詠み込まれる。雅康は定数歌に「道」を多く詠じ、自らの内面と対峙した。そうした精神性ゆえに、雅康は庶流のなかで唯一後世までその名が重んじられる存在になり得たのである。

第二章では、禁裏における作法書の相伝として雅章の歌会作法書二種を取り上げた。雅章は後水尾院の後東福門院および院の息子尊光法親王に対し、それぞれ相応の内容を取捨選択したうえで歌会作法書を相伝している。相伝時期は後水尾院による歌道伝受の後であったと推され、雅章が歌会作法書の相伝を通じて天皇家との繋がりを深めていったことが窺える。

第三章では、雅章の没後に家督を継いだ雅豊の歌会作法書『和歌樵談』から、飛鳥井流や二条流の作法書に加え、『正徹物語』や『兼載雑談』から歌を詠む際の心得や歌人の逸話などを抄出するなど、諸書を通覧した形跡が窺え、作法書をまとめることが歌壇に登場するための一階梯であったことを指摘した。また作法書を編むことは後の相伝に使用するためでもあったと推される。

第四章では、佐賀大学附属図書館小城鍋島文庫『直能公御年譜』の記事に基づき、雅章の歌蹴鞠道の相伝の実態と肥前鍋島藩およびその支藩との関わりについて考察した。鍋島直能は参勤交代の道中で雅章に歌の添削や相伝などを懇望するなかで交流を深め、その働きかけにより本藩鍋島光茂など周辺人物と雅章のネットワークも広がった。また第二節では、祐徳稲荷神社中川文庫に伝来する「飛鳥井雅俊卿五十首和歌」が三条西実隆の草稿の転写本であることを突き止めた。本書は肥前鹿島藩第四代藩主鍋島直條が京都にて所望したものと推され、同時期に入手した雅俊の詠草に紛れ、直條が誤認したものと考えられる。このことは、直條の諸書蒐集や書写活動に飛鳥井家が関わっていたことを示唆してもいよう。

第五章では、幕末期の御所伝受について、孝明天皇崩御直後の箱開見により最後の伝受保持者となった雅典の『古今和歌集伝授』の伝受記録に基づきながら、その流れを辿り、天皇の歌道師範として明治維新に至るまでに飛鳥井家の果たした役割について論じた。

以上、本論文は、従来指摘のなかった秘伝書と古今伝受書との関係や、作法書、伝受記録などを掘り起こし、室町期から幕末までの飛鳥井家の歌学を中心とする文芸の実態とその継承に関する新たな知見を提示するものである。